

病害虫発生予察情報（12月予報）

平成29年11月29日

静岡県病害虫防除所長

1 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (12月の県平均平年値)	予報の根拠
イチゴ	うどんこ病	発生量：並 (発病株率 1.8%)	11月中旬発生量：やや少(－) 気象予報：気温：並(＋)
	炭疽病	発生量：やや少 (発病株率 0.6%)	11月中旬発生量：やや少(－) 気象予報：気温：並(±)
	アブラムシ類	発生量：やや多 (寄生株率 1.3%)	11月中旬発生量：多(＋) 気象予報：気温：並(±)
	ハダニ類	発生量：やや多 (寄生株率 15.3%)	11月中旬発生量：並(±) 気象予報：気温：並(±)
	ハスモンヨトウ	発生量：少 (寄生株率 0.1%)	11月中旬発生量：少(－) 気象予報：気温：並(±)
トマト	葉かび病 すすかび病	発生量：やや少 (発病株率 19.7%)	11月中旬発生量：少(－) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～多い(＋)
	灰色かび病	発生量：やや少 (発病株率 3.2%)	11月中旬発生量：少(発生なし)(－) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～多い(＋)
	黄化葉巻病 (タバココナジラミ)	黄化葉巻病発生量：やや少 (発病株率 4.0%) タバココナジラミ発生量：並 (寄生株率 5.4%)	11月中旬発生量 黄化葉巻病：少(－) コナジラミ類：並(±) 気象予報：気温：並(±)
	ハモグリバエ類	発生量：少 (寄生株率 1.8%)	11月中旬発生量：少(－) 気象予報：気温：並(±)
ネギ (シロネギ)	さび病	発生量：多 (発病株率 3.6%)	11月中旬発生量：やや多(＋) 気象予報：気温：並(＋) 降水量：多い(＋)
	黒斑病・葉枯病	発生量：多 (発病株率 0.9%)	11月中旬発生量：多(＋) 気象予報：気温：並(＋) 降水量：多い(＋)
	ネギアザミウマ	発生量：少 (寄生株率 26.9%)	11月中旬発生量：少(－) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～多い(－)

作物名	病害虫名	予報 (12月の県平均平年値)	予報の根拠
タマネギ	腐敗病	発生量：やや多 (発病株率 0.1%)	11月下旬発生量：並(±) 気象予報：降水量：多い(+)
	灰色腐敗病	発生量：やや多 (発病株率 0.0%)	11月下旬発生量：並(発生なし)(-) 気象予報：気温：並(+) 降水量：多い(+)
	ネギアザミウマ	発生量：少 (寄生株 42.9%)	11月下旬発生量：少(-) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～多い(-)
レタス (非結球 レタス を除く)	斑点細菌病	発生量：並 (発病株率 1.3%)	11月中旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～多い(+)
	べと病	発生量：並 (発病株率 1.6%)	11月中旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～多い(+)
キャベツ	黒腐病	発生量：並 (発病株率 6.5%)	11月下旬発生量：少(-) 気象予報：降水量：多い(+)
	菌核病	発生量：並 (発病株率 0.1%)	11月下旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：並(+) 降水量：多い(+)
	コナガ	発生量：少 (寄生株率 0.2%)	11月下旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～多い(-)
	オオタバコガ	発生量：少 (寄生株率 0.1%)	11月下旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～多い(-)
	タマネギンウワバ	発生量：少 (寄生株率 0.1%)	11月下旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～多い(-)
	アブラムシ類	発生量：少 (寄生株率 1.0%)	11月下旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～多い(-)
ダイコン	黒斑細菌病	発生量：やや少 (発病株率 0.7%)	11月中下旬発生量： 少(発生なし)(-) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～多い(+)
	白さび病	発生量：やや多 (発病株率 8.8%)	11月中下旬発生量：並(±) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～多い(+)

作物名	病害虫名	予報 (12月の県平均平年値)	予報の根拠
ダイコン	モザイク病 (アブラムシ類)	モザイク病発生量：並 (発病株率 1.4%) アブラムシ類発生量：少 (寄生株率 8.1%)	11月中旬発生量 モザイク病：並(±) アブラムシ類：少(-) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～多い(-)
	コナガ	発生量：少 (寄生株率 11%)	11月中旬発生量：少(-) フェロモントラップ誘殺数：少(-) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～多い(-)
	ナモグリバエ	発生量：少 (寄生株率：28.4%)	11月中旬発生量：少(-) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～多い(-)
ウンシュウ ミカン	ミカンハダニ	発生量：並	11月中下旬発生量：並(±) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～多い(-)

表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年(静岡県過去の10年間)との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階で示しています。
- ・ 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年(静岡県過去の10年間)との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況(調査時期と発生量)、気象庁の1ヶ月予報(気温と降水量)を記入しています。その状況が多発要因の場合は(+)、少発要因の場合は(-)を示し、+-を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

2 予報の根拠と防除対策

【イチゴ】

<生育の概況>

第一花房が開花～結実肥大期で、生育は平年並～やや遅い。

●うどんこ病

予報の根拠

- ・ 11月中旬の巡回調査では、平均発病株率は2.7%（平年3.2%）と平年よりもやや少ない発生であった。
- ・ 1か月予報では気温は平年並であるが、ハウス内は本病の発生に好適な環境となる。（本病の発病適温は20℃前後）。

防除対策

- ・ 12月以降は果実での発生も多くなる。初期発生に注意し、発病が少しでもみられるほ場では早急に防除を行う。

●炭疽病

予報の根拠

- ・ 11月中旬の巡回調査では、平均発病株率は0.7%（平年1.0%）と平年よりもやや少ない発生であった。
- ・ 1か月予報では気温は平年並であるが、果実ができ着果負担が増すと発生しやすくなる。（本病は高温多湿条件下で多発する。発病適温は25～30℃）

防除対策

- ・ 発病ほ場では、ハウス内温度が高いと今後も新たな枯れこみが発生する。
- ・ 天窓、側窓の開閉により、ハウス内の気温の過度な上昇をさける。
- ・ 発病を認めた場合は、直ちに発病株を抜き取り、ビニール袋に入れハウスの外に持ち出し処分する。

●アブラムシ類

予報の根拠

- ・ 11月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は5.4%（平年3.4%）で平年より多い発生であった。ただし、1部多発圃場がみられた
- ・ 今後外からの侵入は少なくなるとともに、1か月予報では気温は平年並で、本種の発生を特に助長しない。

防除対策

- ・ アブラムシ類の発生に注意し初期防除に努める。
- ・ 天敵を利用する場合は、寄生されたアブラムシ（マミー）の発生状況をよく観察し、寄生が少なくアブラムシ類が多発した場合は薬剤散布をする。薬剤散布をする時は、天敵に影響が少ない薬剤を選択する。

●ハダニ類

予報の根拠

- ・ 11月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は17.7%（平年15.1%）で平年並の発生であった。発生が多い園地がみられた。
- ・ 1か月予報では、気温は平年並で、本種の発生を特に助長しない。

防除対策

- ・ ハダニ類の寄生が認められた場合は少発生うちに防除を徹底する。
- ・ ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、物理的に作用する剤や天敵を利用する。
- ・ 天敵（チリカブリダニ、ミヤコカブリダニ）を利用する場合は、ハダニ類の発生状況をよく観察する。また、天敵放飼前にはハダニ類の密度を下げる。ハダニ類が増えた時は、天敵に影響が少ない薬剤を選択し散布する。

●ハスモンヨトウ

予報の根拠

- ・ 11月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は0.1%（平年0.4%）で平年より発生が少なかった。フェロモントラップによる誘殺数は、平年に比べ少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年並で本種の発生を特に助長しない。

防除対策

- ・ 11月以降は野外の気温が下がり、外からの侵入は少なくなるが、12月上旬頃まで侵入が見られる。発生初期の若齢幼虫期に防除を徹底する。

【トマト】

<生育の概況>

生育は平年並～やや遅い状況である。

●葉かび病、すすかび病

予報の根拠

- ・ 11月中旬の巡回調査では、本病の平均発病株率は9.9%（平年15.7%）と平年より発生が少なかった。
- ・ 本病の生育適温は、葉かび病20～25℃、すすかび病27℃程度であり、特に多湿条件で発生が多くなる。例年、12月以降はハウスの密閉による多湿で、発生が増加する。1か月予報によると、気温は平年並であるが、降水量は平年並～多いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・ 本病は潜伏期間が2週間程度と長く、多発してからでは薬剤の効果が劣るため、発病が認められたら直ちに薬剤を散布する。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。
- ・ 多湿にならないように換気につとめ、過度の灌水を避ける。
- ・ 発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。特に多発生ほ場では摘み取り作業を徹底する。
- ・ 12月以降は葉かび病が優占する傾向がある。

●灰色かび病

予報の根拠

- ・ 11月中旬の巡回調査では、発生は見られなかった（平年発病株率1.0%）。
- ・ 本病の生育適温は23℃程度であり、特に多湿条件下で発生が多くなる。1か月予報によると、気温は平年並であるが、降水量は平年並～多いため、本病の発生をやや助長する。
- ・ 例年、12月以降はハウスの密閉による多湿で、発生が増加する。

防除対策

- ・ 株の繁茂やハウス内湿度の上昇により発生が増加するので、不要な下葉を除去するとともに、日中の換気を早めに行い、施設内の除湿に努める。
- ・ 予防に重点をおいた薬剤散布を行う。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。
- ・ 発病した果実や茎葉は伝染源となるため速やかに取り除き、ビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。
- ・ 朝夕の急激な冷えこみによる結露は、本病の発生を著しく助長する。そのため、暖房機利用や循環扇による通風などにより植物体への結露を防止し、施設内の湿度低下に努める。

●黄化葉巻病（タバココナジラミ）

予報の根拠

- ・ 11月中旬の巡回調査では、本病の平均発病株率は2.0%（平年3.4%）と発生は平年より少なかった。
- ・ 本病の媒介虫であるコナジラミ類の平均寄生株率は5.4%（平年5.5%）と発生は平年並であった。
- ・ 1か月予報によると、気温は平年並であるため、媒介虫タバココナジラミの増殖を特には助長しない。

防除対策

- ・ 発病株は伝染源となるため、見つけ次第抜き取り、ハウス外の土中深く埋めるなどして適切に処分する。
- ・ 脇芽や摘果などの残さは放置すると野良生えとなり、媒介虫や本病の伝染源となるので、ほ場付近には放置しない。
- ・ タバココナジラミ成虫の新芽への寄生や黄色粘着板の捕獲数に注意し、発生が増加する場合は薬剤防除を実施する。

●ハモグリバエ類

予報の根拠

- ・ 11月中旬の巡回調査では、本種の平均寄生株率は1.8%（平年3.0%）と発生は平年より少なかった。
- ・ 1か月予報によると、気温は平年並であるため、本種の増殖を特には助長しない。

防除対策

- ・ 葉表の白点（産卵痕）や絵描き状の食害痕に注意し、発生が認められる場合は薬剤防除を実施する。本種は幼虫期間が数日から1週間程度と短いため、初期の絵描き症状を見つけ次第防除を行う。

【ネギ（シロネギ）】

<生育の概況>

台風等の影響で、生育の遅れがみられるほ場がある。

●さび病

予報の根拠

- ・ 11月中旬の巡回調査では、発生は2.2%と、平年よりやや多かった。（平年発病株率1.04%）。
- ・ 本病は、気温10～22℃の時期に降雨が続くと発生が多くなる。1か月予報では、気温は平年並、降水量は多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・ 肥料の過不足は発病を助長するので、施肥を適正に行う。
- ・ 薬剤防除は予防散布や発生初期の散布の効果が高いため、予防散布を行う。殺菌剤を連用する場合は、系統の異なる剤を選択し、散布する。

●黒斑病・葉枯病

予報の根拠

- ・ 11月中旬の巡回調査では、平均発病株率16.64%（平年1.6%）と平年より多かった。10月下旬以降の多雨が影響していると考えられる。
- ・ 黒斑病の分生子発芽・形成適温は24～27℃で、降雨が多いと発生が増加する。また、葉枯病の多発気温は15～20℃である。1か月予報では、気温は平年並、降水量は多いため、葉枯病の発生を助長する。

防除対策

- ・ 肥料切れで草勢が低下すると発病しやすくなるので、適切に施肥を行う。
- ・ 薬剤散布は予防散布や発病初期の散布の効果が高いため、予防散布を行う。殺菌剤を連用する場合は、系統の異なる剤を選択し、散布する。

●ネギアザミウマ

予報の根拠

- ・ 11月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は3.8%（平年41.7%）と平年に比べ少なかった。但し、防除員からの情報では、一部のは場で発生が多い。
- ・ 1か月予報では、気温は平年並、降水量は平年並～多いため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・ 12月に入り気温が下がると本種の活動が抑制され被害が目立たなくなるが、成幼虫が葉の付け根等に集合、寄生している場合があるため、発生を確認したら防除を行う。

<その他の病害虫>

●黒腐菌核病

- ・ 本病は一旦発病すると防除が困難になることから、予防に努める。
- ・ 酸性土壌で発病が助長されるため、土寄せ時に石灰資材などで酸度矯正を行って土寄せする。
- ・ 薬剤による防除は、使用回数や使用時期に注意し、株元に処理する。

●軟腐病

- ・ 根傷み等で生育が遅れているほ場では、降雨の前後に薬剤による防除を実施し、予防に努める。

●ネギハモグリバエ

- ・ 本種は蛹で越冬するため、多発ほ場では、翌年4月～5月の初発生時に防除を実施する。

【タマネギ】

<生育の概況>

10月の台風により、一部のほ場で生育に影響が生じている。

●腐敗病

予報の根拠

- ・ 11月下旬の巡回調査では、平均発病株率は0.2%（平年0.2%）で平年並であった。
- ・ 本病は細菌病であり、強風雨や多湿な環境により発生が助長される。1か月予報では、降水量は多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・ 強風雨の直前または直後に予防散布を行う。
- ・ 発生が確認されたほ場では被害株を抜き取り、感染防止を図るとともに、抜き取った株は土中深くに埋めるなどして処分する。

●灰色腐敗病

予報の根拠

- ・ 11月下旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発生なし）。
- ・ 本病は多雨で発生が助長される。1か月予報では、降水量が多いため、発生が助長される。

防除対策

- ・ 降雨が続く場合は、予防散布に努める。薬剤を連用する場合は、系統の異なる剤を選択し防除する。
- ・ 発生が確認されたほ場では被害株を抜き取り、感染防止を図るとともに、抜き取った株は土中深くに埋めるなどして処分する。

●ネギアザミウマ

予報の根拠

- ・ 11月下旬の巡回調査では、平均寄生株率は2.2%（平年41.8%）と平年よりも少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年並、降水量は平年並～多いため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・ 12月に入り気温が下がると、本種の活動が抑制され被害が目立たなくなるが、成幼虫が葉の付け根等に集合、寄生しているため、発生状況を確認して防除を行う。

【レタス（非結球レタスを除く）】

<生育の概況>

定植・生育ともに平年より遅れている。

●斑点細菌病

予報の根拠

- ・ 11月中旬の巡回調査では、発生は見られなかった（平年発病株率0.3%）。
- ・ 本病はトンネル被覆後に結露するような高湿度になると発生が多くなる。1か月予報によると、気温は平年並であるが、降水量は平年並～多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・ 発病は主に結球期以降であるが、結球前に薬剤の予防散布をして葉面の病原細菌密度を下げるのが大切である。
- ・ 降雨が続くときや初発生を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。
- ・ トンネル被覆後は、過湿にならないよう換気に努める。

●べと病

予報の根拠

- ・ 11月中旬の巡回調査では、発生は見られなかった（平年発病株率0.2%）。
- ・ 本病は生育適温10～15℃と比較的低温な多湿条件を好む。1か月予報によると、気温は平年並であり、降水量は平年並～多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・ 初発生を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。
- ・ トンネル被覆後は、過湿にならないよう換気に努める。

<その他の病害虫>

●ビッグベイン病

- ・ 11月中旬の巡回調査では、発生は見られなかった（平年発病株率0.1%）。
- ・ 本病は土壌中に生息する菌によって媒介される土壌伝染性のウイルス病である。そのため、発病株の見られるほ場の土を、靴や農機具などにつけて他のほ場に持ち運ばないように注意する。

【キャベツ】

<生育の概況>

一部のほ場で、10月の台風による生育遅延が見られる。

●黒腐病

予報の根拠

- ・ 11月下旬の巡回調査では、平均発病株率0.2%（平年3.6%）と平年より少なかった。
- ・ 本病は秋期に雨の多い年に発生が多い。11月以降、定期的に降雨があり、更に1か月予報では降水量は多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・ 本病は、例年 12 月まで発生が見られるため、強風雨の直前または直後に薬剤散布を行い、予防や感染の拡大防止に努める。
- ・ 被害残さは感染源となるため、ほ場外で地中深く埋めるなどして適切に処分する。

●菌核病

予報の根拠

- ・ 11 月下旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率 0.04%）。
- ・ 本病は気温 20℃前後で雨の多い年に発生が多い。11 月以降は定期的に降雨があり、1 か月予報では気温は平年並で降水量は多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・ 本病は例年 12 月まで発生が見られるため、薬剤の予防散布や被害の拡大防止に努める。
- ・ 被害残さは感染源となるため、ほ場外で地中深く埋めるなどして適切に処分する。

●コナガ

予報の根拠

- ・ 11 月下旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年寄生株率 0.1%）。
- ・ 1 か月予報では、気温は平年並、降水量は平年並～多いため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・ 発生を確認したら、早めに防除を行う。幼虫は葉裏に生息するので、薬剤が葉裏にかかるように散布する。

●オオタバコガ

予報の根拠

- ・ 11 月下旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年寄生株率 0.3%）。
- ・ 1 か月予報では、気温は平年並、降水量は平年並～多いため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・ 結球内部に入ってしまうと薬剤が届かないため、発生が見られたら早めに防除を行う。

●タマナギンウワバ

予報の根拠

- ・ 11 月下旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年寄生株率 0.2%）。
- ・ 1 か月予報では、気温は平年並、降水量は平年並～多いため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・ 幼虫の発育が進むと食害量が多くなるため、発生が見られたら早めに防除を行う。幼虫は葉裏を加害するため、防除の際は葉裏にも薬液が十分かかるように散布する。

●アブラムシ類

予報の根拠

- ・ 11 月下旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年寄生株率 1.0%）。
- ・ 1 か月予報では、気温は平年並、降水量は平年並～多いため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・ 本種は風通しの悪い場所に多く発生することから、例年発生が認められるほ場では発生に注意し、早めに防除を行う。

【ダイコン】

<生育の概況>

生育は平年並である。

●黒斑細菌病

予報の根拠

- ・ 11月中旬の巡回調査では、発生は見られなかった（平年発病株率0.5%）。
- ・ 1か月予報によると、気温は平年並であるが、降水量は平年並～多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・ 生育の衰えは本病の発生を助長するため、肥料切れと排水に注意し、適切な管理に努める。
- ・ 降雨が続くときや初発生を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。
- ・ 病原細菌は、強風雨等による傷口から侵入するので、強風雨の前か直後に防除を行う。
- ・ 特に、葉柄基部から侵入した場合は根部に影響を与え、商品価値を落とすこともあるため注意する。

●白さび病

予報の根拠

- ・ 11月中下旬の巡回調査では、平均発病株率は3.8%（平年3.8%）と平年並の発生であった。
- ・ 本病は多湿を好み、分生子の発芽最適温度は10℃程度である。1か月予報によると、気温は平年並であり、降水量は平年並～多いため、発生を助長する。

防除対策

- ・ 白さび病が多発するとワッカ症を併発することがあるため、は種時期の遅い作型では、葉での発病が少ないうちに予防散布を行うことが必要である（予防散布の防除適期は間引き後7～30日）。
- ・ 発病残渣は翌年の伝染源となるため、ビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。
- ・ 排水を良好にするなどして多湿にならないように努める。

●モザイク病（アブラムシ類）

予報の根拠

- ・ 11月中旬の巡回調査では、本病の平均発病株率は0.9%（平年0.9%）と発生は平年並であった。
- ・ 本病の媒介虫であるアブラムシ類の平均寄生株率は0.4%（平年4.5%）と発生は平年より少なかった。
- ・ 1か月予報によると、気温は平年並であり、降水量は平年並～多いため、アブラムシ類の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・ 雨が降らない日が続くとアブラムシ類が増える場合があるので、ほ場内の発生に注意し、確認された場合は薬剤防除を実施する。
- ・ 被害株も伝染源となるため、速やかに抜き取り、ほ場外で土中深く埋めるなどして適切に処分する。

●コナガ

予報の根拠

- ・ 11月中旬の巡回調査では、本種の平均寄生株率は0.2%（平年0.4%）と発生は平年より少なかった。
- ・ フェロモントラップによる本種の誘殺状況は、平年より少なく推移している。
- ・ 1か月予報によると、気温は平年並であり、降水量は平年並～多いため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・ 雨が降らない日が続くと急増する場合があるので、ほ場内の発生に注意し、多発している場合は薬剤防除を実施する。

●ナモグリバエ

予報の根拠

- ・ 11月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は9.8%（平年18.7%）と発生は平年より少なかった。
- ・ 1か月予報によると、気温は平年並であり、降水量は平年並～多いため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・ 葉表の白点（産卵痕）や絵描き状の食害痕が多数見られる場合は、薬剤防除を実施する。

【ウンシュウミカン】

<生育の概況>

青島の着色具合は平年並、果実肥大は平年よりやや大きい。

●ミカンハダニ

予報の根拠

- ・ 11月の巡回調査では、平均寄生葉率は2.1%（平年2.1%）で平年並の発生だった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年並、降水量は平年並～多いため、本種の発生を特に助長しない。

防除対策

- ・ 収穫、剪定後、越冬虫を対象にマシン油を散布する。ただし、寒害を受けやすいほ場では3月以降とする。

<その他の病害虫>

●青かび・緑かび病

- ・ 11月の巡回調査では、平均樹上発病果数は0.5個/樹（平年0.5個/樹）と平年並であり、落果発病果数は2.9個/樹（平年2.3個/樹）と平年よりもやや多い発生であった。
- ・ 本病は土壤中に生息している病原菌が、土ぼこりとともに果面に付着して傷口から感染する。そのため、果実に傷がつかないように注意して収穫する。降雨直後の収穫は、果実に傷が付きやすく、病原菌が感染しやすくなるため避ける。また、収穫後は入庫時の予措を徹底するとともに、貯蔵中は点検を行い、発病果を除去する。

【カンキツ全般】

<その他の病害虫>

●かいよう病

- ・ 越冬病斑は重要な伝染源となるため、発生園では冬期中に夏秋梢の剪除、防風垣・防風ネットの整備を徹底し、翌春の新梢への感染拡大を防ぐ。

●カイガラムシ類

- ・ 近年、発生が増加している。剪定後、越冬虫を対象にマシン油乳剤を散布する。ただし、寒害を受けやすい園地での散布は3月以降とする。

【チャ】

<その他の病害虫>

●チャトゲコナジラミ

- ・ チャトゲコナジラミが多発している茶園では、冬期に越冬幼虫を対象に防除を行ない、来年一番茶時期の成虫の発生を抑制する。防除は、本種に適用のあるマシン油乳剤を用いて、幼虫の寄生が多い裾部の葉裏に薬液が届くように散布する。なお、赤焼病の発生が心配される茶園では、銅水和剤等の防除薬剤を散布後、1週間～10日程度のちにマシン油乳剤を散布することで、マシン油による赤焼病の発生助長を抑制することが出来る。

3 季節予報

(1) 1か月予報 (東海地方 平成29年11月23日 名古屋地方気象台発表)

【予報期間】 11月25日から12月24日

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。岐阜県山間部では、平年に比べ曇りや雪または雨の日が多いでしょう。向こう1か月の降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。週別の気温は、1週目は、高い確率50%です。2週目は、低い確率50%です。

【確率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多%
1か月	気温	30	40	30
1か月	降水量	20	40	40
1か月	日照時間	40	40	20
1週目	気温	20	30	50
2週目	気温	50	30	20
3～4週目	気温	30	40	30

【予報の対象期間】

1か月 : 11月25日(土)～12月24日(日)

1週目 : 11月25日(土)～12月1日(金)

2週目 : 12月2日(土)～12月8日(金)

3～4週目 : 12月9日(土)～12月22日(金)

(2) 3か月予報 (東海地方 平成29年11月24日 名古屋地方気象台発表)

【予報期間】 12月から2月

【予想される向こう3か月の天候】

向こう3か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。
12月 平年と同様に晴れの日が多いでしょう。岐阜県山間部では、平年と同様に曇りや雪または雨の日が多いでしょう。気温は、平年並または低い確率ともに40%です。

1月 平年と同様に晴れの日が多いでしょう。岐阜県山間部では、平年と同様に曇りや雪の日が多いでしょう。

2月 平年と同様に晴れの日が多いでしょう。岐阜県山間部では、平年と同様に曇りや雪の日が多いでしょう。

【気温】

3か月			12月			1月			2月		
低	並	高	低	並	高	低	並	高	低	並	高
40	30	30	40	40	20	30	40	30	30	40	30

【降水量】

3か月			12月			1月			2月		
少	並	多	少	並	多	少	並	多	少	並	多
40	30	30	30	40	30	40	30	30	40	30	30

【参考資料】

	平均気温 (°C)			降水量 (mm)		
	12月	1月	2月	12月	1月	2月
浜松	8.4	5.9	6.5	52	57	78
静岡	9.0	6.7	7.3	63	75	102
三島	7.9	5.7	6.3	55	74	88

*1981年～2010年の平均 *降水量は小数点以下を四捨五入しています。

※ 利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い(少ない)」「平年並」「高い(多い)」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1981～2010年の30年間における各階級の出現率が等分(それぞれ33%)となるように決めてあります。(気候的出現率と呼びます)。
- ・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い(少ない)場合は「平年に比べて多い(少ない)」、また平年の日数と同程度に多い(少ない)場合には「平年と同様に多い(少ない)」と表現します。なお、単に多い(少ない)と表現した場合には対象期間の2分の1より多い(少ない)ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病虫害防除所 〒438-0803 磐田市富丘678-1 TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780 URL http://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html
--